

過日、雄谷良成氏(社会福祉法人佛子園、理事長)のお話を伺う機会がありました。氏は金沢市を中心に多様な活動をしていることで知られています。その一つは町おこし。後継がない廃寺をリフォームし、温泉を掘り、地域の交流の場に使っています。そこは高齢者のデイサービス、障害者の就労事業と生活介護事業を展開する場でもあり、また地域の方の働き先でもあります(もちろんボランティア活動も)。皆が渾然一体となって場が作られているとのこと。そんななか認知症の女性が重度の身体障害の方の口におやつを運ぼうとしたことがあり、それを見守るうちにその女性も車いすの青年も不自由ながら動きを合わせようとするようになったそうです。女性は家族には「行かないとあの子が死んでしまう」というのが口ぐせになり、家族からはおばあちゃんの夜間徘徊が減って助かったと言われたという興味深いお話がありました。

高齢者の生きがいや社会参加が重要だと言われています。辻一郎氏(東北大学)は生きがいのある人の生存率が高い、人生の目的がある人は要介護になりにくい、受け身の関わりではなく主体的な社会参加を作っていかなければならないとレポートし、「互助のビジネスモデル化」(若干の費用をもらって簡単な介護などをする)をも提唱しています。

これらは国の「まち・ひと・しごと創生本部」の動きにもつながるのですが、これは単に地方に限った問題ではなく、福祉のあり方、また地域社会のあり方とも密接に関連しています。雄谷氏は「社会福祉法人がどのように地方創生に参画するのか。制度に定められた福祉しかやらないということでもいいのか」と問題を投げかけました。東京にいるから関係ない、とは言えないと思いました。

(平成 27 年 11 月)